



駆け出しの

じいちゃんは駆けだしの研究者だ。

近所にある家に遊びに行くと、いつも難しそうな本や論文を読んでいる。

「今日はなに読んでるの？」

そう聞くと、じいちゃんと言う。

「おもしろい性質を持つ材料が開発されたらしくてなあ」

興味がわいて詳しいことを尋ねてみると、じいちゃんは金属がどうか分子がどうかと言って教えてくれる。

正直なところ、そのほとんどの内容はよく分からない。でも、目を輝かせながら話すじいちゃんのことを見ていると、自分も世界の秘密に触れられたような気がしてワクワクしてくる。

じいちゃんが勤める研究所にも何度か行ったことがあって、白衣やゴーグルを身につけて実験をやらせてもらったこともある。

液体を試験管の中で混ぜ合わせたり、別の液体をピペットで吸いあげて垂らしたり、温めたり冷やしたり。そうするうちに、透明なものが一瞬のうちにピンクになったり、赤いものが青になったり、暗いところで蛍みたいに光ったり。

「手品みたいだなあ……」

そう言うと、じいちゃんは笑う。

「手品じゃない。化学変化だ」

楽しそうな顔を見て、ぼくもいつかじいちゃんみたいになりたいなあ、と思う。

じいちゃんが研究者になった背景をちゃんと知ったのは、月日が流れて、ぼくが高校生になってからのことだった。

研究者の道に進みたい。

そう意識するようになって話を聞くと、こんなことを教えてくれた。

じいちゃんは大学の理学部を卒業してから総合商社に入社して、ずっと金属を扱う部署で営業の仕事をしていた。いろいろなことに興味があって商社に入りはしたけれど、そのあいだも科学への関心は胸にあって、本を読んだり科学番組を見たりして趣味として親しんでいた。

そんなじいちゃんは、定年が近づくにつれてこう思うようになったらしい。

定年したら大学に入り直して、研究者を目指してみたい、と。

その頃の世間では人生100年という考え方が浸透していて、定年後に大学に入って第二の人生を歩みだす人も多かった。

その大学でもいろいろな選択肢がある中で、特に人気が高かった道のひとつが、いわゆる、基礎研究<sup>①</sup>の研究者だった。

理由のひとつには、世間的な科学への関心の高まりがあった。

そもそも基礎研究とは、実用的な面がすぐには見えづらかったり、分かりやすい形で成果が現れるまでに時間がかかるような研究のことだ。科学の発展のためには重要だとされている一方で、ひと昔までは実用性を重んじる国の方針で予算が削られたり、就職難からその道に進む若い人が減っていたりした。それに危機感を持った人たちが、まずはもっと広く科学への関心を持ってもらいたいと啓蒙活動に取り組んだおかげで、科学にかかわってみたいと思う人が増えていた。

その科学のうちでもシニア層に特に基礎研究が好まれたのは、ひとえに「知<sup>②</sup>、という資産を次の世代に遺すことができるからだ。人生の終わりに向けて、地位や名誉などよりも少しでも後世のために価値あるものを遺したい。そう考える人とうまく方向性が合致した形だった。



シニアは若い人に比べると、体力や脳の瞬発力の面ではどうしても勝ちづらい。が、シニアにはそれを補って余りあるほどの幅広い知識や経験がある。さらには焦らず泰然と研究に取り組める心の余裕や、自由に使える時間があるのも大きかった。

そんな中、じいちゃんは研究者になるために大学と大学院で勉強をした。そして、卒業後にはたまたま空きがあった研究施設に入所して今に至っているということだった。改めて本人から話を聞いて、ぼくは人生の先輩としてじいちゃんへの尊敬が心に芽生えた。

一方で、正直なところ、今のぼくには共感できないところもあった。

せっかくやるなら基礎研究より、残りの人生で結果が出る可能性が高い応用研究をやればいいのに……。

そう思う気持ちは、じいちゃんと話していて余計にふくらんだ。

ぼくは聞かずにはいられなかった。

「じいちゃんの研究って、結局は何の役に立つの？」

じいちゃんは言った。

「そんなことは分からないし、そういう基準では考えてもいないなあ」

ぼくは思う。

それって無責任なんじゃないかなあ、と。

たしかに、相対性理論の研究が後にGPSにつながったり、iPS細胞の研究が再生医療につながったり、基礎研究が大切だという意見は理解できた。

でも、少なくとも、役に立つか分からないまままで研究するより、確実に役立つことが分かっていることに取り組んだほうが社会にとっても有意義だし、効率的なんじゃないだろうか。

それに、同じ研究者の道を進むなら、ぼくはもっと社会的なインパクトがあるようなことがしてみたい。

その素直な気持ちを伝えると、じいちゃんは笑った。

「まあ、みんながみんな基礎研究だけしていても科学は前に進まないから、いいんじゃないか」

それ以来、一方的な気まずさもあって、ぼくはじいちゃんと少しずつ距離を取るようになっていった。

考えが一変したのは、一年ほどがたつてのことだった。じいちゃんが急に倒れて運ばれて、そのまま亡くなってしまったのだ。

喪失感にさいなまれながら、じいちゃんの勤めていた研究所に遺品を取りに行ったときのことだった。ぼくは残された膨大で緻密な資料を前に圧倒されて呆然とした。

研究所の人たちも、じいちゃんがいかに心血をそそいで野心的な研究をしていたかを力説してくれた。

それらに触れているうちに、ぼくはようやく間違いを悟った。

勝手に理解したつもりになっていたけれど、自分はなんにも分かってなかった――。

研究者の道に進みたい。

その夢は、あれから数年たった今でも変わらない。

でも、あの頃と違うのは、こう思うようになったことだ。

できるなら、自分もじいちゃんの研究の跡を継ぐ一員に加わりたい。役に立つかどうかよりも、長い目線でじっくり世界の秘密に迫っていききたい。

そのためには、まずは博士論文を仕上げるのが重要で、今のぼくは夢中になって研究に打ちこむ日々を送っている。

同期のシニアのみなさんと、お互いを磨き合いながら。

あの頃のじいちゃんみたいに、駆けだしの研究者としてしっかりスタートを切るために。